



創立 2011年6月17日
SAITAMA UKISHIRO
JAPAN

埼玉浮き城プロバスクラブ

2025.1.17発行
No. 163



例会日 毎月第3金曜日 行田市商工センター 行田市忍2-1-8 TEL 048-553-0510
事務局 〒360-0841 埼玉県熊谷市新堀 811-5 (幹事 森田義弘方) TEL・FAX 048-531-3630
会長 岩崎 安裕 副会長 加藤 力也 幹事 森田 義弘 広報情報委員長 牧野 憲史

本日のプログラム

第164回 新年例会(1月17日)

国歌斉唱(君が代)・プロバス賛歌斉唱
会長挨拶 会長 岩崎 安裕
幹事報告/委員長報告・交流担当・同好会報告 幹事 森田 義弘
年次総会 会長ノミネー選出について
バースデー報告と会員スピーチ
安部節子会員 大澤由子会員 椎橋俊夫会員
富山恒雄会員 岩崎安裕会員
卓話 小島 敏男会員
ハッピーボックス披露 例会委員
閉会のことば 副会長 加藤 力也

第163回 通常例会(12月20日)

■幹事報告 幹事 森田 義弘

12月例会では八王子PCより塚本会長をはじめ4名のゲストを迎えて開催されました。一昨年の8月に岩崎会長が八王子を訪問した返礼として、行田の地を訪問頂きました。まさにPCの本質である相互コミュニケーションの重要性を実感できました。

年次総会では次々年度の会長ノミネーが行われ、藤倉会員が推挙されました。また阪谷様より『渋沢同族とその理念について』との卓話を戴き、我が郷土の偉人について深く知ることが出来ました。その後采帆久亭で忘年会が開催され大いに楽しみました。

<第163回例会出席者 会員26名中20名参加 出席率76.9%
家族会員2名 ゲスト5名 総勢27名>

お祝い 11月、12月に誕生日を迎えられた会員



左より
小島敏男会員(11月) 保泉欣嗣会員(12月)
加藤力也会員(12月) 岩崎安裕会長
根岸友恵会員(11月)は欠席



八王子プロバスクラブ
塚本会長ご挨拶



塚本吉紀会長、田中信昭様、
持田律三様、齋藤万理子様

会長スピーチ

会長 岩崎 安裕



新年あけましておめでとうございます。会員の皆様におかれましては、お健やかに新たな年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年5月には、さわやかコンサートが会員の皆様のご協力で大成功となりました。心から感謝申し上げます。さて、今期当初のアクシデント発生の際にはクラブの状況を早急に対策すべき事項があると考えました。例会もなく(理事会のみ開催)、会報ない状態は寂しく、クラブ運営の心配が多々あったと思います。改めてお詫び申し上げます。

本年度は残り6ヶ月となりましたが、昨年も運営方針あげましたが再度4項目について実現に向け協力の程お願い致します。

①一人一人会員としての自覚と責任感をより発揮し会の躍進を図っていただきたい。

- ②各委員会は委員長を中心に顔合わせ、コミュニティや繋がりづくりを食事会等委員長の個人プレイでも行い、会員同士の親睦、接触をこの際取り組むことが必要ではないでしょうか。
- ③理事・委員長等による企画会議を開き、多事争論しても良いのではないのでしょうか。
- ④会員の減少が続いており、一人でも多くの新規会員の勧誘を推進していただきたい。

来年度は森田新会長のもと創立15周年を迎えます。組織の新たな構築を図るべき時に来ているのではないかと考えております。クラブの更なる発展に寄与する活動を皆様と共に考えて行きたいと願っております。

結びになりましたが、会員皆様のご健康とご多幸を心より祈念いたしますと共に、今後共ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

第163回例会 ハッピーボックス発表

◎師走に入っても好天が続き、霜が降りる日少なく皇帝ダリアが咲き誇っています。東京八王子プロバスケットボール皆様、卓話講師の阪谷様、心より歓迎申し上げます。(岩崎会長) ◎八王子プロバスケットボールからお忙しいなか参加されありがとうございます。本日は85才のお祝いもして頂きありがとうございました。又、阪谷先生の講演も素晴らしかったです。幸福いっぱい。(加藤副会長) ◎先日クリスマスの飾りを庭の木の木に取り付けました。暗い夜道を鮮やかに照らしてくれています。(森田幹事) ◎今日の例会に続いて忘年会楽しみにしています。(畠山顧問) ◎アット言う間に今年も12月。時間の経つ速さに改めて感慨深いものがあります。本日は阪谷様お話大変楽しみにしております。八王子の皆様遠路おいで頂き誠にありがとうございます。大歓迎です。(須郷顧問) ◎阪谷様の卓話楽しみにしています。東京八王子プロバスケットボールの皆様歓迎いたします。(田口会員) ◎年の暮れ気は焦ってもなかなか思うように動けません。希望を持ちたいが、希望すらあらず、時の移ろいを待つのみです。生きている限りなるがままで生きるしかありません。(高橋会員) ◎今日の阪谷様の卓話大いに楽しみに拝聴させて頂きます。(保泉会員) ◎アット言う間の1年で、大変お世話になりました。阪谷様には卓話有難うございます。(鈴木克枝会員) ◎東京八王子プロバスケットボールの皆様、卓話の阪谷先生、ようこ

そおいでいただきました。心より歓迎いたします。会員の皆様、暮れも押し詰まってまいりました。どうぞ良い新年をお迎え下さい。(安部会員) ◎年の瀬で慌ただしい中です。寒波も襲来しそうです。健康には充分注意し新しい年を迎えましょう。阪谷様の卓話楽しみにしております。(藤倉会員) ◎本日の卓話、大変楽しみにしてして来ました。今年も残りわずか、病魔に負けず生活していきたいと思えます。(山本会員) ◎出席できて幸せです。(柿沼会員) ◎凡そ半年振りにプロバスケットボールへ復帰させて戴きます。ご心配お掛け致しました。宜しくお願い致します。(牧野会員) ◎喪も明けましたので、11月九州一周、12月四国一周自走の一人旅で巨樹巡礼してきました。(木村会員) ◎阪谷先生、ご講演有難うございました。(鈴木秀憲会員) ◎昨日の新聞、10大ニュースの第一位として新一万札発行が載っていました。本日の阪谷綾子先生の講演にピッタリです。(小林会員) ◎寒さが一段と増してまいりました。八王子のみなさんようこそ。阪谷綾子さんの卓話楽しみにしています。(小島会員) ◎本年も残り少なくなって参りました。今日はお客様をお迎えして賑やかな例会となり、卓話も忘年会も楽しみです。1日楽しませていただきます。八王子プロバスケットボールの皆様方からもご協力いただきありがとうございました。(大澤会員)

文責 牧野憲史



第163回 例会卓話

渋沢同族とその理念について 一同族の一軒を担った者として 阪谷綾子

渋沢家とは私の曾祖父・阪谷芳郎(よしろう)が栄一の次女・琴子と結婚したので姻戚関係となりました。栄一には7人の子供があり、渋沢同族は栄一の跡取りを含むこの7人の家で構成されています。各々の家の直系、原則長男家が代々同族を引き継ぎました。

栄一の最初の妻で私の玄祖母の千代が明治15年7月14日に40歳の若さで当時流行したコレラで亡くなりました。しかし翌年には後妻となる兼子と再婚したため、異母兄弟姉妹ができることになりました。栄一は母が違う理由で先々のトラブルがあっては困ると悩み、家の憲法のようなものを作っておきたいと考え、明治20年5月17日に誕生しました。「家法」の特徴は娘=女性もメンバーとなっている点にあります。これは栄一がかつてパリにわたり欧州各国を見て、身分や性別が違って互いに対等に会話等をしている姿に驚き影響を受け、これこ

そが自分が理想とする日本のあるべき姿だと感じたのでしょう。

制定の目的は栄一保有の株式の配当を均等な割合で各家に分配することでした。最終目標は栄一が子孫の協和とその家業の鞏固(きょうこ)とを永遠に保維(ほい)することで、87か条を定め、第二章から「同族」という文言が出現します。

また「家法」と共に「家訓」も決めました。「家法」を守っていくためには各々の人間の処世についても注意事項を守り過ぎなければ、いくら「家法」を定めたとしても、同族として正しく実行できないだろうと考えたためです。栄一は同族7軒分の「家法」と「家訓」を手ずから書きあげ、各家に付与しました。

さて、私共渋沢同族の中では、栄一について「資本主義の父」という言葉は全く出てきません。常に「公益の人」として刷り込まれました。栄一はすべての人にとって、どうすれば平等で幸福を感じられるようになるかを第一に考えて仕事を進めましたが、私物化することはありませんでした。唯一生涯を通してやった仕事は東京養育院の院長でした。ここは現在東京都健康長寿医療センターとして残っていますが、当時は生活に窮している人や孤児などを受け入れて、生きる道を切り拓くための施

設で、栄一には相当な思い入れがあり、その原動力はやはり「公益に資する」という一言に尽きると思います。

このように私共も常に「公益」ということをベースに行動するというを肝に銘じており、これは同族会を含めて栄一の考え方の基本理念となっていると考えます。

当初同族会は任意団体として発足しましたが、大正4年3月に資本金330万円で渋沢同族株式会社となりました。太平洋戦争終結まで運営されましたが、昭和21年12月にGHQによる財閥解体により、指定を受けた15の財閥の1つに数えられ解体されました。その後は任意団体に戻り、孫で社長の渋沢敬三が亡くなった昭和38年10月25日の翌年1月31日に開かれた第829回を最後に休会状態となりました。その後現当主・渋沢雅英により同族会は終了することが宣言され、今は渋沢同族という言葉のみが親族間で残っているに過ぎません。

現代の様相を見たとき、栄一はどのように感じるでしょうか？ 栄一が幼少期を過ごした頃は武士の世で、農民以下は全て武士やお役人等の言うことが絶対でした。しかし現代は情報統制も殆どされず情報は容易く得

られ、勿論身分の壁も撤廃されて人権的にも保障され、コミュニケーションも自由になりましたが、SNSの出現で新たな局面を迎えました。それは自分の考えを簡単に公表できる反面、偽情報も簡単に回るようになり、それに人々が踊らされることが多くなったことです。栄一は基本的に性善説に立ち、何よりも公序良俗を大前提にしていたと思いますが、現代の人々の発言は果たしてこの前提を踏まえているのでしょうか？ こう考えると、現状を知ったら栄一は大いに嘆くでしょう。

今般、栄一が1万円札の肖像に選ばれ、再び光を当てて頂けることになりましたが、「資本主義の父」という側面だけでなく、栄一の真の心、心意気の深さに目を向け「公益」という点を考え直して頂き、自分さえよければ良いという考えではなく、思いやりをもって、隣人や世間への影響を考え貢献することを頭に片隅において行動するようになれば、デマや縷言に惑わされず真理を見抜く力がつき、栄一が望んだ人々の真の幸せを少しずつでも得られるのではないかと、そうならば有難いと切に願っております。

会 員 投 稿



我が人生を振り返って

須 郷 隆

2月7日86歳となります。過ぎ去った日々を思うとあつという間の時であったような気がします。特に60代後半以降は、時間の速さが年々増してきたような気がしてなりません。

然しながら、経てきた年月を振り返ると86年はそれなりに長く、よくぞここまでという感慨が深まります。改めて我が人生の来し方を考えると、大学卒業までの23年、会社時代の45年そしてその後の18年に大別できる。

その人生の中で、自身にとってどう生きるか・どう生きて行くべきかを考える大きなエポックは、15歳（目の病）と60歳（癌）であったと思う。

中学入学後も勉強よりも野球・遊びに熱中していた中、3年生の夏休み前頃から黒板の字がなんとなく見えにくい事・時折何日か頭痛が続く事があり何だか変だなとの思いがよぎった事が思い出される。そんな10月のある日、野球の試合で簡単なフライのボールを見失いエラーをしてしまった。左目の視力が急激に落ちている事実を知らされる場面であった。

眼科医の診断では、眼球の真ん中が何らかの原因で白く濁っている白内障の一種で当時の技術では手術はほぼ

出来ない、しかも原因不明の白濁であり右目も同様な状態になるかもしれないとの事であった。ひょっとしたら両眼失明するかもという現実、これまで考えたことのない将来の生き方を考えざるを得なくなった。

まずは進学するか否か、進学するとすれば何処か、盲学校を含めあれこれ悩んだ末に、両親のまだどうなるかわからない状態なのだから普通高校を目指したらとのアドバイスに従った。

高校時代は、右目は何時見えなくなるのか不安と恐れの中、精神状態であったが幸い3年間経っても異常はなく少しずつ精神は安定していった。

大学時代も片目状態でしたが、疲れ目から来る頭痛の頻度は少なくなり失明への不安はほとんどなくなった。

結局片目状態は、50年以上続き67歳の時の左目手術で解消した。50年以上たった手術であり執刀する医師の緊張感がこちらにもひしひしと伝わり、看護師が医師に患者の血圧が200を超えたと伝えていたのが懐かしく思い出される。

どう生きるか悩んでいた中・高生時代の目の障害も時間の経過と共にこれ以上は悪くならないと思うようになるに従い、心の不安定さはいつの間にか無くなり時折の目疲れによる頭痛も気にならなくなった。

45年間の会社員生活は、60歳時の舌癌もあつたがそれなりに充実したものであつた。奇しくも15歳時の眼病以来45年経った60歳の時、それ以前の1年間分からなかった舌癌がようやく判明した。

59歳になる正月休みのある日、突然喉奥にキリで刺されたような強い痛みを感じた。それから1年間益々強

くなる喉奥痛の原因は何か、都内の高名な病院を含め耳鼻咽喉科の数人の医師に診察して頂いたが決定的な事は分からず、病院では、多分国内でも珍しい原因不明の下顎神経症ではないかと診断された。この病気の治療法はなくこれから益々痛みは強くなり耐えがたいものになるであろうとの事であった。診断通り痛みは耐え難く痛み止め薬に頼る日々であった。年明けの3月末ふと下顎神経症の因は以前に痛めた頸椎との関係ではないかと思ひ産業医も兼ねる整形外科の医師を訪ね状況を話したところ、いきなり舌を見せてとの事であった。

結果は、すぐに口腔外科に行くべしと云われ親切にも聖路加病院へ紹介状を書いてくれた。聖路加での診察は、舌の右側奥の裏側に直径3センチ大の腫瘍がある事、リンパ節に転移の可能性があると説明を受けた。手術結果は予想通り右胸側のリンパ節に転移があり舌癌とあわせ切除したが、肺への転移も懸念される事から再

度の手術がなされた。状況は4期の初めとの事であった。幸い肺への転移は免れたがあと1ヶ月遅かったら確実に転移していたであろうとの事であった。

65歳まではかなり再発を懸念していたが何事もなく過ぎ、68歳で完全リタイア出来た。15歳時の状況と違い生か死かある時期常に意識していたが70歳頃には、その意識は不思議な事に全くなり日々をより楽しく豊かに過ごそうと思うようになっていた。

そんな折、縁あって我がプロバスケットボールに創立時入会する事が出来、今日に至っている。人生の第3期の始まりである。爾来今日まで多くの方々と知り合い、沢山の刺激を頂いて来た。思いもよらなかった俳句とも出会い日々の生活は馬齢を重ねる中益々豊かになっている。

歳相応の高血圧・糖尿等の薬の厄介にはなっているが、健康に留意し残された人生を更に楽しく豊かに過ごして行きたいと思っている。



行田文化団体と共に

大澤 由子

私は十数年前より、行田市文化団体の代表をしております。行田では戦後の混乱期を経て文化団体が昭和二十四年に結成され、参加団体は急速に増加し四十団体にもなりました。そこで同じ分野は連盟にという事で現在は三十三団体となりました。文化団体が結成されて以来、先輩諸先生方のたゆまぬ努力により今年で結成七十六年目を迎える事が出来ました。会員の方々は芸術家の方から、生涯学習として楽しんで学んでいる方々と多岐にわたっております。分野は全く違いますが、その作品や舞台発表は素晴らしくあらためて実感しております。

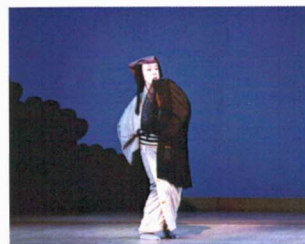
私は昭和四十八年に文化団体に日本舞踊連盟として加入いたしました。又、西川流宗家に師事し西川流の代表として主に国立劇場や歌舞伎座等に出演させていただきました。その折、今は無き教育長だった吉田稔先生が時々国立劇場に見に来てくださいました。これはその時にいただいた御歌です。

「扇由女師二人椀久きりきりとまたしなやかに男舞舞う」
「地方の声響きて大きく舞いければ嘆声上がる拍手のおこる」

これは私にとって思い入れのある大切な吉田稔先生の御歌ですが、これを戴いた当時より、俳句を学ばせていただいている今の方が一入感慨深いものがあります。俳句は御縁をいただき、右も左も分からないまま、怖いもの知らずで入会させていただきました。はや十年になります。会員の皆様の御指導の元で学ぶ楽しさを味わっております。

地元行田では扇由女会を主宰し、公民館活動や文化庁の伝統文化親子教室等、後進の育成に携わっています。ここ数年私たち文化活動する者にとっては大変息苦しい日々でした。そして高齢化の波はどこの市町村でも頭を悩ませております。

今後も文化の香り高い歴史のある行田にふさわしい文化活動を皆様と共に楽しみたいと思います。
「気がかりを始末し米寿や初春(はる)祝う」
「あるがまゝ道一すじの踊り初め」



二人椀久



京鹿の子娘道成寺

浮き城俳句会 12月句会(第140会) 兼題-小春・小春日和、当季雑詠

散紅葉愛でて踏みしめ下る坂	木島 泉	早や師走過ぎ行く時を止(とど)めたし	須郷岐川
微かなり落葉時雨ややさしげに	大澤扇由女	小春日や堀越しに聞く童歌(わらべうた)	田口半茶
来るべき時季を見据えて冬耕す	安部節子	川風を避けて身を寄す浮寝鳥	岩崎步睦
小春日や杖の媪(おうな)の歩に合す	鈴木理翠	静かなり落葉のみちは我が標(しるべ)	高橋善村
終活も気負いないま年暮れる	小島凡太		